



供血者の実情調査と献血促進および阻害因子に関する研究

研究分担者
井上 慎吾 (日本赤十字社 血液事業本部)

研究協力者
松田 清功 (日本赤十字社 血液事業本部)

研究要旨

日本赤十字社が実施する供血者を対象としたインターネット調査等を通じて、献血の促進及び阻害因子への理解を深め、効果的な献血推進に関する研究に資することを目的とする。「献血推進 2020」への取り組みにかかる基本的な考え方をアンケート調査の結果を通じて、献血の促進及び阻害因子に関する分析を試みた。

研究目的

日本赤十字社が実施する供血者を対象とした量的・質的調査を通じて、献血の促進及び阻害因子への理解を深め、効果的な献血推進に関する研究に資すること

研究方法

献血推進広報効果調査インターネット調査として、対象エリアは全国から16歳から69歳の男女6,194人から回答を得た。献血行動についての調査と2015年度の広報施策認知度について調査し、献血の促進及び阻害因子に関する分析を試みた。

(倫理面への配慮)

該当なし

研究結果

1. 献血に行かなくなった理由 (図1参照)

<対象者(1,920人)：献血経験者で昨年献血に行かなかった人>

「条件が合わなかった」「場所や時間が合わなかった」が行かなくなった理由の上位。

献血経験者で昨年献血に行かなかった人の「行かなくなった理由」は、「献血できる条件が合わなかったから」が30%と最も高くなっている。次いで、「献血できる場所や時間が合わなかったから」が25%で続く。「特に理由はない」という方も23%と高い。

性年代別で見ると、男性よりも女性で「献血できる条件が合わなかったから」(男性23%、女性38%)が高くなっている。

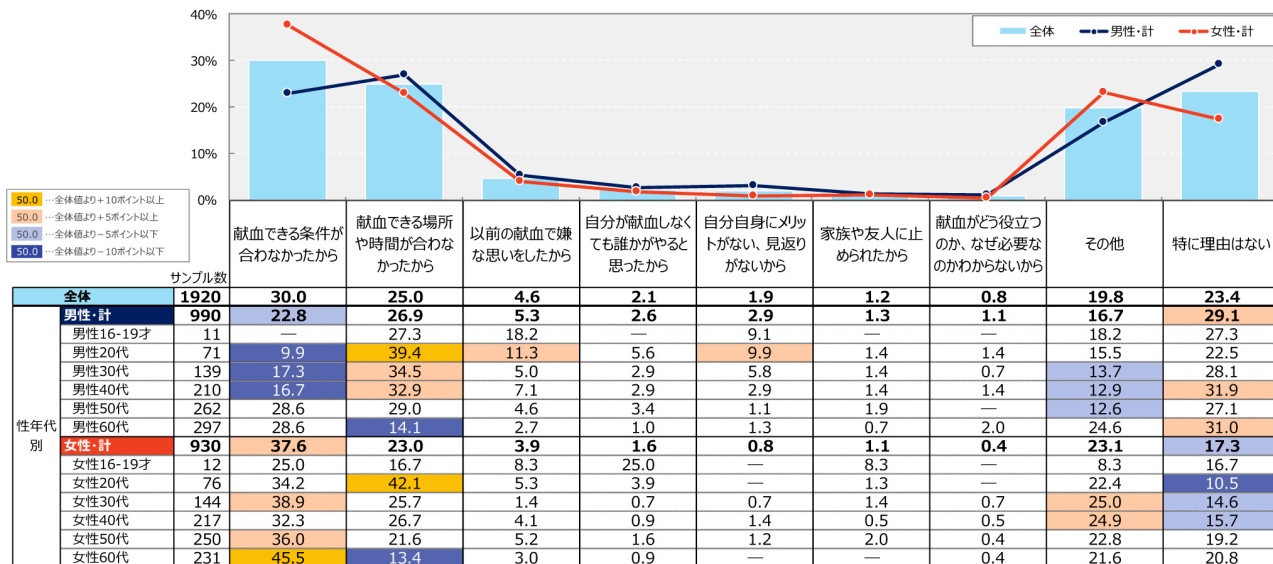


図1

「献血できる場所や時間が合わなかったから」が20代男女・30代男性が高い。

2. 献血に行ったことがない理由 (図2 参照)

<対象者 (3,056 人) : 献血未経験者>

30代以下で「怖い、痛そう、副作用が不安」という意識が強く、献血への不安感が大きい。

献血未経験者の献血に行ったことがない理由をみると、「針や採血が怖い、痛そう、副作用が不安だから」が29%でトップ。次いで、「調べたら、献血できる条件が合わなかったから」(18%)、「献血できる場所や時間、条件などが分からないから」(11%)の順。

男女ともに30代以下の若年層では「針や採血が怖い、痛そう、副作用が不安だから」が3割以上と高くなっている。また、「調べたら、献血できる条件が合わなかったから」は女性で25%と高く、男性との差は3倍近い。

3. 2015年度の広報施策認知度:全体ベース (図3 参照)
<対象者 (6,194 人) : 全員>

「はたちの献血」の認知度は63%で突出している。「けんけつちゃん」の認知は3割。

2015年～2016年の施策・イベント・広報物の認知度を全体でみると、「はたちの献血」の認知度が63%と最も高くなっている。次いで「けんけつちゃん」(31%)、「Power of 献血」(28%)、「LOVE in Action プロジェクト」(23%)が上位にあがる。

性年代別でみると、「はたちの献血」は男性よりも女性に認知されている。また、男女ともに20代以下で各施策・イベントなどの認知が高くなっている。

一方で、「10代では献血セミナー」からの認知率が他の世代に比べて比較的高い。

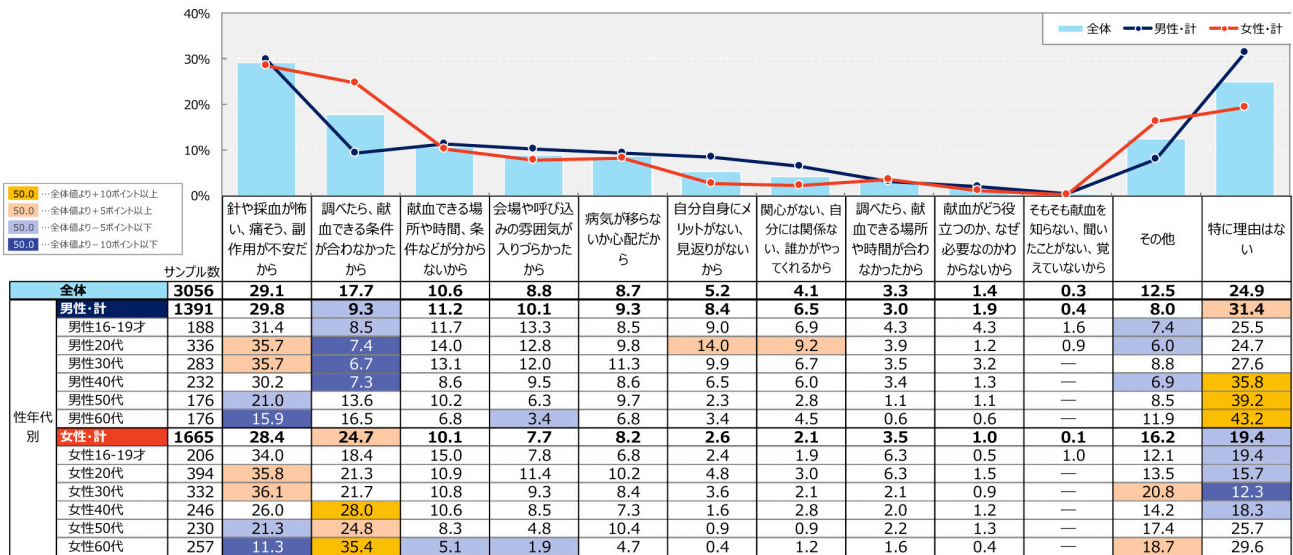


図2

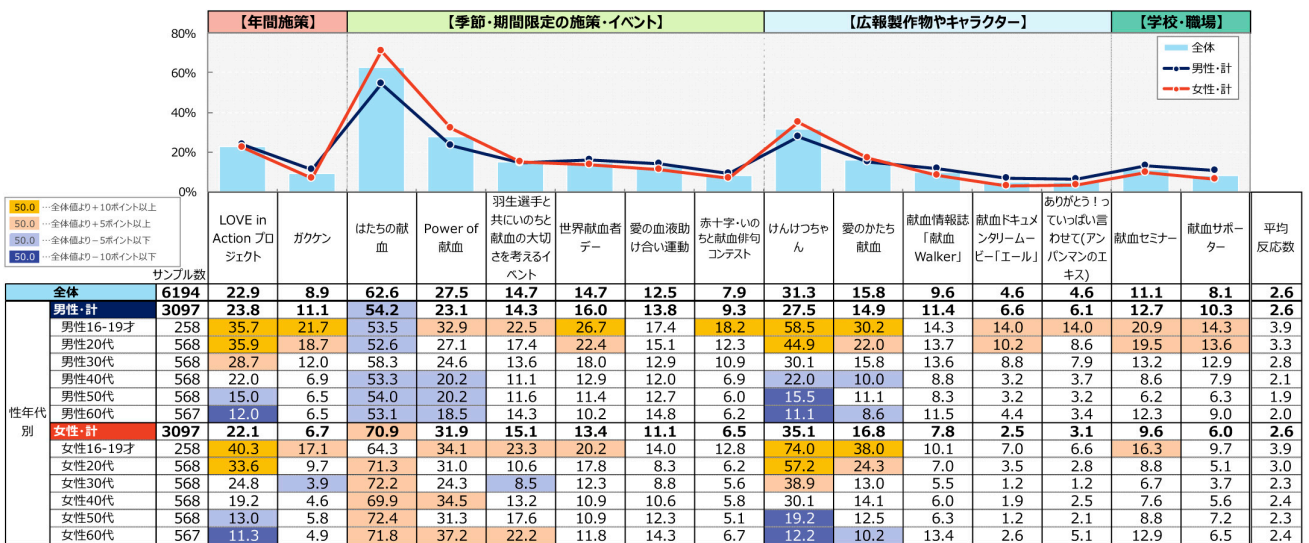


図3

4. 学校における献血に触れ合う機会の受入れについて
(図 4 参照)

平成 24 年から 5 年続けての「学校における献血に触れ合う機会の受入れについて」の通知が行われている。

献血の阻害因子となっている献血の必要性や場所の認識を高めていくためには、学校教育に踏み込んだ献血思想の普及が重要であることが今回のインターネット調査から分析できた。

5. 広報施策接触後の行動：昨年献血経験者ベース
(図 5 参照)

＜対象者 (1,218 人)：最近 1 年間献血経験者 & 各広報内容・広報物認知者＞

「ドキュメンタリームービー」「アンパンマンのエキス」は検索行動、情報発信行動を喚起。

昨年献血経験者の広報内容・広報物接触後の行動をみると、『献血ドキュメンタリームービー「エール」』『ありがとう！っていっぱい言わせて (アンパンマンのエキス)』認知者では、「スマートフォンや携帯電話で、献血やキャンペーンに関する情報を調べた」「家族・友

人と献血やキャンペーンについて話した」「SNS やブログに書き込みをした」という行動率が高くなっている。

「献血会場に行った」は『LOVE in Action プロジェクト』からが 13% と最も高い。また、認知の高い「はたちの献血」は行動喚起が弱い傾向にある。

考察

献血経験者で献血に行かなくなった理由に「条件が合わなかった」「場所や時間が合わなかった」が行かなくなった理由の上位を占めた。献血未経験者で、献血に行ったことがない理由として、30 代以下で「怖い、痛そう、副作用が不安」という意識が強く、献血への不安感が大きい。

「針や採血が怖い、痛そう、副作用が不安だから」が 29% でトップ。次いで、「調べたら、献血できる条件が合わなかったから」(18%)、「献血できる場所や時間、条件などが分からないから」(11%) の順であることが確認できた。一方で、献血経験者の「ドキュメンタリームービー」「アンパンマンのエキス」は検索行動、情報発信行動を喚起することが解り、輸血を受けた患者さ

事務連絡
平成28年3月4日

各都道府県・指定都市教育委員会学校保健主管課
各都道府県私立学校主管課
附属学校を置く国立大学法人事務局
各国公立高等専門学校事務局 御中

文部科学省初等中等教育局健康教育・食育課

学校における献血に触れ合う機会の受け入れについて(依頼)

標記について、平成28年3月3日付け薬生血発0303第1号で厚生労働省医薬・生活衛生局血液対策課より別紙(写)のとおり、依頼がありました。

については、各都道府県教育委員会におかれては、**所管の高等学校**及び域内の市区町村教育委員会等に対して、各都道府県私立学校主管課におかれては、所管の学校法人等に対して周知されるようお願いいたします。

図 4

＜昨年献血経験者＞

実施内容	認知率 (n=1218)	サンプル数	PCで、献血や キャンペーンに関 する情報を調べ た	スマートフォンや 携帯電話で、 献血やキャン ペーンに関する 情報を調べた	家族・友人と献 血やキャンペー ンについて話した	献血に関するイ ベントに行っ たり、キャンペー ンに応募した	献血に関して SNSやブログに 書き込みした	献血会場 (ルーム、バス、 等) に行った	その他	特に何もしな かった	行動した・計
			50.0	50.0	50.0	50.0	50.0	50.0	50.0	50.0	50.0
【年間施策】											
LOVE in Action プロジェクト	37.1	452	15.3	10.6	9.3	8.0	4.9	13.1	—	52.7	47.3
ガクケン	21.8	265	15.1	17.7	13.2	11.3	7.5	6.4	—	43.4	56.6
【季節・期間 限定の施策・ イベント】											
はたちの献血	70.4	858	5.8	5.9	5.2	4.8	2.4	5.8	0.1	74.1	25.9
Power of 献血	41.9	510	8.4	8.2	7.1	7.3	3.7	6.5	—	65.5	34.5
羽生選手と共に いのちと献血の大切さを考えるイベント	25.2	307	9.8	13.4	13.0	9.4	5.2	4.6	—	52.4	47.6
世界献血者デー	25.3	308	12.7	12.0	8.1	12.3	4.9	6.5	—	53.9	46.1
愛の血液助け合い運動	22.8	278	11.5	12.2	10.8	9.7	4.3	7.2	—	52.5	47.5
赤十字・いのちと献血俳句コンテスト	18.2	222	11.7	10.8	11.3	17.1	5.9	4.1	—	49.5	50.5
【広報製作物 やキャラク ター】											
献血情報誌「献血Walker」	23.5	286	10.5	10.8	9.8	10.5	4.5	6.3	—	53.5	46.5
献血ドキュメンタリームービー「エール」	14.0	171	8.8	22.2	19.9	11.7	7.0	4.7	—	36.3	63.7
ありがとう！っていっぱい言わせて (アンパンマンのエキス)	13.3	162	14.2	15.4	21.0	12.3	8.0	3.7	—	35.2	64.8
愛のかたち献血	31.0	377	6.9	10.9	8.5	9.8	2.1	6.4	—	61.3	38.7
けんけつちゃん	52.3	637	6.0	7.7	6.1	5.5	2.0	6.4	—	70.6	29.4
【学校・職場】											
献血セミナー	22.1	269	11.5	14.1	13.8	11.9	4.8	3.7	—	48.7	51.3
献血サポーター	18.6	226	12.8	14.6	18.6	9.7	3.1	6.2	—	44.7	55.3

図 5

んのを伝えることが、献血者の献血行動促進につながるということが調査から判断できた。

結論

若年層の献血推進は喫緊の課題として、国の中期目標が平成 17 年から立てられ、様々な施策が行われてきた。

今回の調査から得られたことは、広報施策認知度の中で「10代では献血セミナー」からの高校生の献血意識に関する調査認知率が他の世代に比べて比較的高いことが解った。

高校生の献血意識に関する調査（竹下明裕ら）が行ったデータからも、学校で献血に関する授業や血液センターが出張して行われるセミナーを受けた記憶のある高校生は全体で 9.0%、記憶のない者は 89.9%であった。献血経験のある群では記憶のある高校生は 21.8%で、ない群の 7.6%を上回った ($p < 0.0001$) (Fig. 2E4)。一方、47.1%の高校生が献血に関する授業やセミナーの受講を希望していた¹⁾。

また、日本赤十字社が平成 27 年 12 月 3 日～平成 27 年 12 月 16 日に行った初回献血者対象の「献血に係るアンケート調査結果」を行った。

◆全体で 6,363 人であり、10代 (57.2%)、20代 (25.3%) となり全体の 80%以上を占めていた。

(献血への動機について)

高校生(2,466人)、大学・専門学校生(1,442人)であったこともあり、①献血バスが学校にきたから (1,453人)、②献血可能年齢になったから (1,113人)、③友達から誘われた (993人) という結果であった。

(献血の認知について)

献血セミナー(1,402人)、②献血会場内の告知(1,330人)、③テレビ(859人)から知ったという結果であった。

これらの調査から、高校生への献血セミナーを実施することが、献血行動へ極めて有用であることが判明した。

学校教育へ「献血」の大切さを伝える「献血セミナー」が継続できるよう、関係省庁・関係機関と連携を強化することが重要である。

「献血」の授業が増えることにより、献血に触れ合う機会が高校生等を中心に、啓発されることが LOVE in Action 等の広報活動とクロスして、若年層の献血基盤の確立へ繋がると考える。

そして、出来る限り献血セミナーを実施するにあたり DVD やスライド等の教材を「小学生用」「中学生用」「高校生以上」等に分類し、教員へ提供できるような献血教育の教材作りを図る必要がある。

学生献血推進ボランティアやライオンズクラブ等の献血推進団体の方々と連携を図りながら、献血セミナーの実施回数を増やして、若年層の自発的なボランティア行動に導くためにも献血推進協議会や関係機関と連携を図り、献血行動へ繋げたい。

文献

Takeshita A, Furumaki H, Asai T, Kajiwara M, Iwao N, Muroi K ; Survey of high school student attitudes to blood donation, Japanese Journal of Transfusion and Cell Therapy, Vol. 62(6) p 711-717, 2016

健康危険情報

該当なし

研究発表

該当なし

知的財産権の出願・取得状況（予定を含む）

該当なし